

セテニル・デ・ラス・ボデガス



素材研究 (海外)



自然の岩を活用した建築は、この村の歴史とともに発達してきたものです



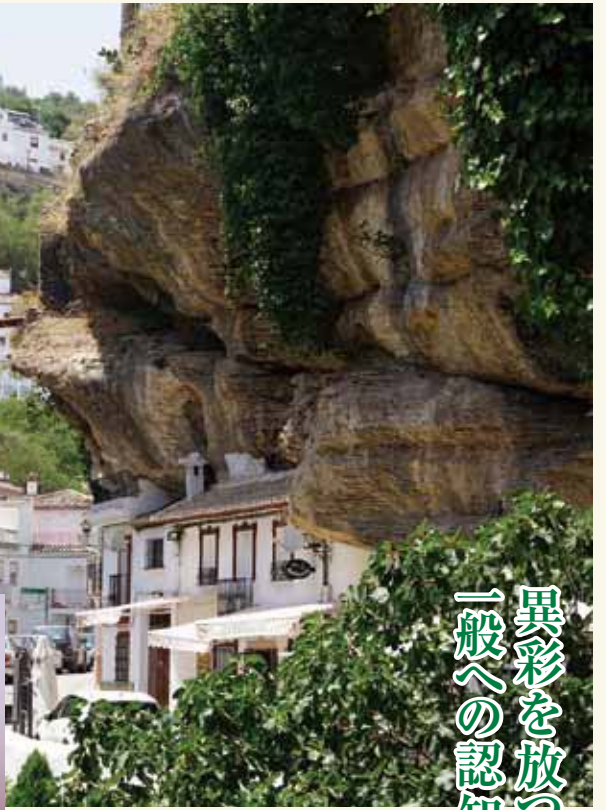
セテニルも人気の高い「白い村」ルートの一角を占める存在です



村の周辺に広がるオリーブ畑は、アンダルシアの牧歌的な風景そのものです



セテニルのあるカディス県はシェリー酒の発祥地としても知られています



突き出した岩の下に軒を連ねる住居群は、日本人なら誰もが目を疑う光景です

異彩を放つアンダルシアの「白い村」 一般への認知広めたい秘められた魅力

今年10月から成田／マドリッド線でイベリア航空による直行便の運航再開も決まり、注目が高まるスペイン。フラメンコやパエリア、闘牛など、日本人がイメージする典型的なスペインの魅力が凝縮されたアンダルシア地方は、カディス県北部からマラガ県西部のロンダ山系に点在する「白い村」も人気を集めています。

張り出した岩の下に続く住居群

セテニル・デ・ラス・ボデガスは、川に浸食された岩の隙間を埋めるように住居が建てられており、他の場所では見ることができないような独特の景観が広がっています。

アンダルシア州のカディスから東北東へ約160キロに位置する人口3000人という小さな村は、いわゆる「PUEBLO BLANCO（白い村）」の1つに数えられ、「白い村」の多くが防衛上の理由から断崖などの高所に造られている中であって、極めてユニークな存在と言えるかもしれません。先史時代から雨露をしのぐために洞窟が利用されてきたであろうことは想像に難くありませんが、張り出した岩の下に続く住居群は、今も建物の中に入ると岩がそのまま天井や壁に利用されています。新石器時代にまでさかのぼるアンダルシ

アの歴史は、紀元前1100年にフェニキア人がヨーロッパ、最古の都市と言われるカディスを創設し、表舞台に現れました。その後、ギリシヤ人、カルタゴ人の侵入を経て、紀元前3世紀にはローマ帝国の支配下に置かれ、8世紀に入つてアフリカ大陸のイスラム教徒による侵攻を受けると、800年にわたりアラブ文化が根付くこととなります。

完熟市場に残る日本人向け素材

レコンキスタと呼ばれるキリスト教徒による国土回復運動が増した13世紀には、アンダルシア地方でもコルドバやセビヤなどが次々に奪回されていきましたが、セテニル・デ・ラス・ボデガスはキリスト教徒が取り戻したのは15世紀も後半に入つてからのことでした。村の名前の「セテニル」は「7回の失敗」を意味しており、イスラム教徒を駆逐するまでの苦難の歴史も刻まれています。

村にはアラブ時代の塔や貯水槽が残されているほか、小高い丘の上にある教会は、スペイン各地で見られるイスラム建築に影響を受けた建築様式であるムタル様式とゴシック様式の混在した建物となっています。

スペイン政府観光局では、「完熟市場と思われがちなアンダルシアにも、日本人の嗜好に合う場所がまだまだ眠っています。既存ツアーでは定番のロンダから少し足を延ばせば、圧巻の光景をご覧いただける魅力を日本市場に広めてほしい」と呼びかけています。